

A I 時代を生き抜く力

～クリティカルシンキング～

シンギュラリティ（技術的特異点）というのを私は信じていません。シンギュラリティとは人工知能（A I）が自律的に自己フィードバックを繰り返し、ついには人間を上回る知性を持つという仮説のことです。シンギュラリティに到達するのは2045年という予測があり、2045年問題とも言われています。

「人工知能（A I）」が「自律的」な「自己フィードバック」を繰り返すとは言っても、そのフィードバックの正体は計算です。人間の知的活動を計算に置き換えるには限界があります。その限界の範囲内の「自律的」「自己フィードバック」に過ぎないということです。

第10号「A Iと読解力」で紹介したように、数学者の新井紀子さんは、2011年から2016年11月まで、ロボットによる東大合格にチャレンジし、断念しました。新井さんによれば、A Iと呼ばれているものは全て「A Iもどき」であり、人工知能と呼ぶにふさわしいA Iは今後もできる見通しはないということです。A Iの限界を読解力に見た新井さんは、2016年に中高生対象のリーディングスキルテストを実施し、2018年に『A I vs 教科書が読めない子どもたち』が発行されます。

私は、常々、「A I時代を生き抜く力」とは「A Iが苦手なことができる力」だと言っています。A Iが苦手なことは「読むこと」「書くこと」「自ら学ぶこと」、即ち、A I時代を生き抜く力は「読む力」「書く力」「自ら学ぶ力」です。前二者は「読んで、考えて、書く」、即ち「思考力、判断力、表現力」です。「自ら学ぶ力」が「自律的」な「自己フィードバック」を可能にします。これらの力を一言で言うならば、「言語能力」ということになります。ですから、皆さん、毎度毎度のことですが、**「読んで、考えて、書いて」言語能力を鍛えましょう。**

さて、ようやく本題です。上述した「A I時代を生き抜く力」は、角度を変えれば、「クリティカルシンキング（批判的思考）」に行き着きます。クリティカルシンキングは、ロジカルシンキング（論理的思考）とセットで説明されます。ロジカルであっても、クリティカルでなければ間違った論拠・根拠でロジカルに整合を取ってしまう危険性があると言われてはいますが、そもそもそんな思考を「クリティカルではないがロジカルではある」と認めるべきでしょうか。私は、「クリティカルでなければロジカルではない」という立場です。（クリティカルであればロジカルであるわけではありませんが。）

クリティカルの訳語が「批判的」であることから「なんでもかんでも反対する態度」と誤解されがちですが、それは「批判」という訳語が不適切なのではなく、「批判」という日本語の意味がねじ曲がってしまったということです。「批判」即ち「批評して判断する」、「良い所、悪い所をはっきり見分け、評価・判定する」ということです。とは言え、「なんでもかんでも反対する」とは似て非なる

「なんでもかんでも疑ってかかる」ことは実に大切で、私はその実践者です。このことについては、実は銀杏祭パンフレットに書きました。書きましたが、パンフレットが配られるのはこのシンフォニー配信より後になります。ですから、ここでは銀杏祭パンフレットには書けなかったことを書いておきます。

私が意図的に「なんでもかんでも疑ってかかる」ようになったのは、1993年、33歳の時からだったように思います。それ以前も、無意識、自然に、そういう思考癖があったように思いますが、その思考法が意図的となったのは、1993年、ジャーナリスト、ニュースキャスター、故・筑紫哲也さんの「私は悪魔の誘い出し役 (devil's advocate) と呼ばれる役をやってみようと思う。悪魔の側に身を寄せ、悪魔の聞き役となり、なぜ、何を悪魔がやりたがっているのかを引き出す役のことである」という言葉に触れてからだだと思います。(悪魔というのは比喻ですから、私の周りの皆さん、「私は悪魔?」などと思わないようにしてください。)
「悪魔の誘い出し」、これこそが物事の正体に迫る方法であり、ファシリテート(促進)(急がば回れ)であり、クリティカルだと思ふのです。(銀杏祭パンフレットでは、devil's advocate を「悪魔の代弁者」としてしています。)

もう少し、クリティカルを具体化します。5W1Hに代表される具体を曖昧にすることなく思考することです。程度を表す言葉(形容詞、形容動詞、副詞)で誤魔化さずに、具体の名詞・動詞で思考しましょう。事実と意見を区別しましょう。クリティカルは手段、クリティカルを目的化することなく、目的(問題、課題)を外さない。結論が出ても、思考停止せずに、問い直すことです。

時代認識は「不確実で複雑な時代(※)」。そういう時代を生き抜くには、「主体的な意志のある自立した『個』」によるクリティカルシンキングが必要です。AI時代を生き抜くということは、AIを使いこなすということです。AIが出力したことを正しく検証し、正しく評価することです。そのために必要な能力がクリティカルシンキングの能力だということです。「不確実で複雑な時代」は、唯一解のない時代です。「納得解」「最適解」の時代です。納得解、最適解をAIは出すことができません。納得解、最適解を出せるのは、クリティカルに思考できる人間だけです。皆さん、クリティカルに思考しましょう。**思考は言語により行われます。言語能力を鍛え、クリティカルに思考しましょう。**

(私が非常にクリティカルなのは、これまでの不勉強により、「既存の公式」に極めて弱いことも幸いしています。しかし、「既存の公式」を理解したうえでのクリティカルに勝てないことは言うまでもありません。)

(※**V**olatility (変動性)、**U**ncertainty (不確実性)、**C**omplexity (複雑性)、**A**mbiguity (曖昧性)の頭文字を取ったVUCAと同義。VUCAは1990年代の軍事用語であり、2010年代からビジネス用語となった。私の「不確実で複雑な時代」は、1978年、高校3年生の時に、担任の先生から毎日のように聞かされた同年のベストセラー「不確実性の時代」(アメリカの経済学者・ガルブレイスの著作の日本語タイトル)に由来する。)

.....
「夏を制する者は受験を制する」、この言葉を正しく翻訳しておきます。夏を制した者はほんの一握り。この一握りだけでは大学の定員はまだガラガラです。しかも、夏を制しただけでは合格は決まりません。当然、夏以降の勉強で合否が決まります。自分を信じて勉強し続けた現役生が大きく伸びるのは年明けです。最後の模試でも、ほとんどの場合、いい結果は出ません。しかし、大きく伸びるのは、最後の模試が終わってからです。焦ることなく、自分を信じて、「意図的な勉強」を続けてください。大丈夫、自分を信じて、必ずうまく行く。